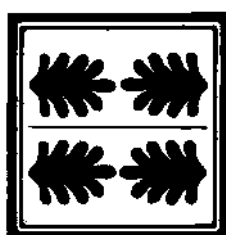


天保凶録

③ 松本清張



天保凶録
(三)



講談社文庫

定価360円

てんぼう ずろく
天保図録(三)

まつもと せいちょう
松本清張

昭和57年 3 月 15 日 第 1 刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Seicho Matsumoto 1982

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

茶屋の客

本庄茂平次は都家の裏口から懷^{ふところ}手でぬっとはいった。女中がうす暗がりからそれを見て、
「これは本庄の旦那さま、いらっしやいませ」
と、あわててお辞儀をした。

「おかみはいるか？」

「はい、ただ今」

女中は裏口から奥へ走り込んで、おかみさん、おかみさん、と大きな声で呼んでいる。ほかの
女中も顔を出して、これも茂平次を見てあわててお辞儀をした。

「本庄の旦那さま、どうぞ」

「暗いな」

茂平次はあたりを見回した。

「はい。お布令^{ふれい}でなるべく質素にしております」

「感心だ。これなら奉行所も文句をいう筋合いはない」

奥からあだっばいおかみが小走りに、来て、上がり框^{かまち}にすわって三つ指を突いた。

「これは本庄の旦那さま。ご機嫌^{きげん}よろしゅう。さあ、どうぞ奥に」

「では、上がるとするかな……ところで、おかみ、小菊をすぐに呼んでくれ」

「ほほほ……旦那さまのお気の早い。まあ、それはあとのお愉^{たの}しみで、とにかく、お座敷にお上がりにくさいまし」

「通るぞ」

茂平次は長い刀を腰から抜いて手に持ち、夜目にも磨きがかかったとわかる長廊下を歩いた。

すると、この茂平次を横から見、眼を瞠^{みは}った男がいた。裏口の目立たないところに腰をおろし、煙管^{きせる}を口にくわえていたのだが、彼の前に銚子が出ているから、この家に客で来た誰かの供にちがいがなかった。茂平次の姿に小首を捻^{ひね}っていたが、彼が奥へ通ると、その男は、

「これ、姐^{ねえ}さん」

と、女中の一人を呼び止めた。

「はい、何でございますか？」

「いま、奥の座敷に通られたお客さまは、何というお方だえ？」

「はい、あれは」

と、女中は言いかけたが、急に低い声になって、

「南町奉行鳥居甲斐守さまご家来、本庄茂平次さまと申されます」

「本庄？」

男は、また首を傾げた。

男は青山に住む旗本飯田主水正もんどのしょうの中間ちゆうげんの源助だった。今夜、主人の供についてきて、ここで待っている。

——うす暗い裏口からはいってきたいまの侍姿さむらいすがたの身体からだの格好にどうも見憶えみおぼがあるのだ。これが明るい昼だったら、その男の面体めんていがはつきりとわかるから、かえって源助の不審は起こらなかったかもしれない。しかし、賑やかな灯も遠慮している当節のことだった。そのうす暗がりに、武士の身体からだの輪郭りんかくが黒くにじみ出ていたから、その形が源助の眼を惹いたのだ。
(たしかに見た人だ)

もとより、暗いから相手の人相はわからない。身体全体が黒い影絵になっている。だが、源助の記憶にある男も顔を黒い布で包んでいたのだ。印象は、むしろその背の低いずんぐりとした小太りの姿にあった。いや、何よりもそのガニ股またまたの歩き方に見憶えがあったのだ。

源助は、あの日のことを憶えている。

けだるいくらいの昼下がりがだった。強い陽に邸内に生えた雑草がほこりで白くなっていた。源助はその草を除とっていた。その時、門の脇戸を開けてひよいと人はいってきたのだ。

源助は、そのとき、相手の男としばらく対立していた。いや、初めはべつだん妙には思われなかったくらいだ。突然すぎたためだったかもしれない。黒い覆面ふくめんでいるのも咎めるとが気が起こらなかったほどである。けだるい夏の昼間だし、どこかに意識の弛緩しかんがあったかもしれない。

向こうの男も、ちょうど往来に立ち停まったように源助を見ていたが、やがて短く光った物を出した。源助は、やっとそれが短刀だと気付いた。

源助が棒立ちになっていると、男は用事でも思い出したように、はいってきた脇の門扉からさつさと姿を消した。そのときの身体の特徴が、ここでも見た男の姿である。

門前の道路で、御殿女中が駕籠かごの中で殺されたのを源助が発見したのは、その直後だった。これも奇態な話で、若党を呼びに行った隙すきに駕籠もろとも殺された女が失なくなっていった。あとで主人の飯田主水正に話したときも、まだ夢見心地だったのである。

二度と会うことはないと思っていたその特徴の男がここに来ている！ 鳥居甲斐守の家来、本庄茂平次だと聞かされた。

(はてね)

源助は眼をこすって杯さかずきに銚子を傾けた。まさか、と思う。錯覚さつかくということもあるし、似たような身体つきの男も世間にはざらにいる。歩き方にしても同じ癖の人間は多い。

だいいち、あのとき、覆面の男の声を聞いていないから、今の客の声で同一人物だと明確に指摘できる自信はつかなかった。

(しかし、似ている！)

本庄茂平次は座敷に通った。

「こんな部屋しかないのか？」

彼は立ったまま、不平そうにあたりを見回した。

「申しわけございません。旦那さまにいつも使っていただく部屋が、あいにくとふさがっておりますので」

おかみは笑顔で詫びた。

「何だ……金持ちの町人でも来ているのか？」

「いいえ、そういう方ではございませんけど……空きましたら、さっそく、旦那さまをそこにお迎えいたします」

「仕方がないな」

茂平次はひとまず、ものわかりのいいところをみせてすわった。四人の芸者がはいってきた。

「今晚は」

と、女たちは口々に茂平次に挨拶した。

茂平次は機嫌がいい。その芸者たちを相手にしばらくは他愛のない話を聞かせていた。茂平次の話といえば、決まって長崎のことである。これは江戸の者が聞いて珍しいし、おもしろい。

ことに、長崎にいる唐人の生活ぶりを手振り身振りで話す。長崎の会所では直接、唐人や蘭人と折衝していただけに、知識は豊富だから、聞いていて実感があつた。女たちは茂平次の話に眼を瞠ったり、口に手を当てて笑い転げたりした。

そのうち茂平次は、そろそろ退屈そうな顔を見せてきた。

「小菊はどうした？」

彼はさっきからそれを待っている。今に小菊が姿を見せると思えばこそ、女たちの相手になっていたのだった。

「小菊姐ねえさんもすぐに来ますでしょう。いま少しご辛抱なされませ。ほんに待つ身は辛いものでございますね。けど、待つ身になっても、待たれる身になるなと言います。小菊さんも、本庄さまに逢あいたくて、今ごろは心せわしくお化粧の最中だと思います」

「お愉しみは、なるべく後にしたほうがそれだけ深うございます。わたしただけで気に入らないでしょうが、まあまあ、そうお急せきにならずにご辛抱くださいませ」

女たちは口々に慰めた。

茂平次は、いったんそれでおさまった。しかし、しだいに焦これてくる様子が露骨にみえてきた。

「おかみを呼べ」

酔いも手伝っている。それに、自分をこうまで待たせているという憤懣かんまんが、今度は小菊が来ないのではないかという不安に変わり、どこかの家に回ったままそこで根を生はやしているのではないかという邪推に移ってきた。小菊と向かい合っている客への嫉妬しとも起こってくる。

「ご用でございますか？」

おかみは茂平次の機嫌が悪いと聞いて、愛嬌あいきょう笑いをこぼして茂平次の前にいざり寄った。

「旦那さま、まあ、おひとつ、お流れを頂戴します」

「おかみ、小菊はどうした？」

「はい。いま使いの者を迎えにやりましたところ、もうすぐ支度ができるとのことでした。ほかならぬ本庄の旦那さまにお逢いするのですから、小菊さんも念を入れてきれいにしてくるのでございましょう。旦那さま、もうしばらくご辛抱くださいませ。今夜はごゆっくりでよろしゅうござ

ざいましょう？」

茂平次はおかみの追従^{ついしよう}になだめられていたが、そのうち酔いが深まると、また人相が怪しくなってきた。眼がすわり、顔が蒼^{あお}くなっている。もつとも、色の黒い茂平次は蒼いといっても他の者には判別がつかない。

彼はその辺の料理をじろじろと見回していた。ここの料理は茶屋だけに凝^こっているから、杓子^{しゃくし}定規^{じようぎ}に取り締まろうと思えば、いくらでも儉約令に引かかる——このへんの事情は戦時中のヤミ料理屋を考えるとよい。

茂平次はじりじりしていたが、そのために尿意^{にようい}を催し、手洗いに起^たった。すでに足もとが少し危ない。芸者のひとりが傍に付き添って廊下に出たが、機嫌の悪い茂平次は、それを邪慳^{じやけん}に振り払った。

廊下には、外からわからないようにしているが、華^{はな}やかな灯もついているし、三味線の音^ねも聞こえている。用を足して戻りかけた茂平次の耳は、その三味線の音に混^まじった女の笑い声を咎^{とが}めた。

茂平次はふいと立ち停まった。

女の笑いはまだつづいている。少し酔っているようだが、その声が茂平次に聞き覚えがあった。いや、それどころではない、彼が焦^{あせ}りながら待っている小菊のものなのだ。

茂平次は廊下をよたよたと歩いた。自分では足音を忍ばせているつもりだったが、酔っているので、つい、音が高くなる。

女の笑いはやんだが、話し声はその部屋の前に来たときにはっきりと耳にはいった。

茂平次はしばらく躊躇^{ためら}っていたが、さすがに、その部屋の襖^{ふすま}に手を掛けることはできなかつた。その代わり、部屋に戻ったときの彼の顔は苦虫^{にがむし}をかみつぶしたようになっていた。座敷には芸者が四、五人持ちぶさたにお互いに話していたが、

「えい、うるさい」

と、彼は怒鳴った。

「おかみはどうした？」

誰かが呼びにいったので、またおかみが走り込んだ。

「まあ、旦那さま。どうなさいました？」

茂平次は彼女を睨^{にら}みつけた。

「やい、おかみ。小菊はどうした？」

「ほんとうに、小菊さんたら遅うございますね。どうしたんでしょう？ 誰かをまたすぐ迎えに

やらせます」

「わざわざ、小菊のところに行くことはない。小菊はすぐ近くにいますぞ」

おかみは、息をのんで、すぐにはあとの言葉が出ないでいる。茂平次に知られたとわかってからは、どう取りつくろいようもないのだ。

茂平次は眼を据えて叫んだ。

「やい、おれを長崎の田舎者^{いなかもの}と思つて馬鹿^{ばか}にするな、ごまかそうと思つてもそうは問屋が卸さないぞ」

「まあ、旦那さま」

と、おかみがなだめようとすると、彼は彼女の肩をこづいた。

「何を言やあがる。おかみ、小菊はその座敷にちゃんとすわっているではないか。それをつべこべ言つて、支度をしているの、化粧がどうのと、よくもそんなでたらめが言えたの。すぐさま、あの座敷からここに曳きずつてこい」

「本庄の旦那さま」

と、おかみは畳に両手をついて頭をこすりつけた。

「まことに申し訳ございません。いいえ、嘘を言ったわけではございませんが、その……あまり向こうの座敷でお客さまが小菊さんを止めなさいますので、つい、もうしばらくご辛抱ねがおうと思ひまして」

「なに、向こうの客が止めたと……」

茂平次には、客が小菊の手を取ったり、肩を抱いたりして戯れている様子が眼の前にひろがった。彼はたちまち、その妄想に嫉妬が湧いてきた。

「どこの誰だ？」

「はい、それが……」

「言えぬのか……よし、おまえが客を大事にして言えぬなら、おれが小菊を引っ張ってくる」

茂平次は膳の前からすつくと起ち上がった。

ほかの芸者たちは茂平次の剣幕に怖れて、肩を寄せ合っている。その中の一人が機転を利かしたつもりで、この場の次第を小菊に知らせようと部屋を出ていった。茂平次の眼は、それをのが

さなかつた。

彼は、その芸者のあとを追うようにして廊下を泳いだ。おかみが蒼くなつてあとを追つたが、茂平次の劍幕の凄さに、うしろから引き止めることができないでいる。

茂平次は、芸者が開けた襖に早くも脚の半分を差し込んだ。

「あれっ」

芸者が気づいて仰天すると、茂平次は、その襖をがらりと開けた。そこは控えの間で、もう一つ奥の座敷は襖で遮られている。小菊に報らせようとした芸者は慄えながら片隅に退いた。茂平次は、その襖の前に立って大きな声で喚いた。

「小菊」

返事はなかつた。

「小菊、小菊」

彼は呼びつづけた。

「おれだ。本庄茂平次だ。さいぜんからおまえを呼んでいる。さあ、その客は誰だか知らないが、すぐさまおれのところに来るのだ。よいか？」

襖の内側はしんとして人声もなかつた。茂平次は苛立った。

「小菊、返事がないところを見ると、そこなる客が手放さないのだな。よし、襖をあけるぞ」

「断わる」

とつぜん、男の声が答えた。洪い落ち着いた調子だった。

「なに？」

茂平次は、襖に叫んだ。

「誰だ？」

「誰でもよい。ここは、わたしが借りている座敷だ。いふなれば、わたしの城だ。一步も踏み込みはさせぬ」

「おもしれえ」

と、茂平次は巻舌まきじたになった。

「そっちはシロだか、クロだかしれねえが、こっちはそこにゐる女に用があるのだ。小菊を出せばそれでよし、出さねえときはこの襖を開けて踏み込むからそう思え。どうだ、小菊を出すか、出さねえか。……おれは南町奉行家来、本庄茂平次という者だ。やい、しつかと性根を据えて返答しろ」

「無体なことを言う人だ」

と、相手の声には笑いが混じっていた。

「南町奉行の家来衆なら、一段と無体は申さぬもの。おおかた、今を時めく鳥居甲斐守殿の名前を騙かたった無頼漢ごうきであろう。さっさとこの場から立ち去るがよいぞ」

「なに、偽者にせものだと？ この野郎」

あつ、という間もなかった。茂平次が襖を蹴けるように開けると、床柱を背負ひつて、ひとりの男が脇息きょうそくに凭もたれて端然とすわっていた。

年齢ととしのころ三十すぎ、眉が濃く、鼻梁びりょうの徹とおった顔だが、やや太り気味なのがどっしりとした貫禄を感じさせた。眼に微笑を含んで茂平次を穏やかに見返している。

茂平次が思わずひるんだのは、その男が華美な身装の武士だったからだ。衣服は絹ずくめで、羽織は眼のさめるような地紫の小紋、小袖は白綸子で、金糸で下がり藤の散らしの縫取りである。

その横に、酔いで眼の赧くなつた小菊が、男のほうへ身体を斜に傾けていた。

「だ、誰だ」

茂平次は吃つて相手に叫んだ。

小菊が男の傍にいたのを見ただけでも、頭の中がかつとのぼせた。彼はそこに仁王立ちになつた。後ろにはこの家のおかみや芸者たちの眼が見ていることだ。弱いところはみせられなかつた。

その武士は懷手をしたまま片手で、朱の杯を宙に支えていたが、

「それは、あんたが役目としてわたしに訊くのか、それとも、この座敷に踏み込んだ不屈者の戯言か？」

と訊き返した。

役目の上で人の名前を訊くのかと反問されて、本庄茂平次はとっさの返事に詰まつた。

彼は奉行鳥居甲斐守の家来だが、奉行所の役人ではない。職権の上で人を咎め立てすることはできないのだ。しかし、ここで臆してはならないと思つた茂平次は、相手の男を睨めつけた。

もつとも、彼がただの士でないことぐらいは、さつきから茂平次にも見当がついてきている。身装といい、余裕をもつた貫禄といい、また、こういう場所で贅沢な遊びをしている様子といい、かなりの身分だとはわかっている。これが茂平次を一瞬たじろがせたが、その男の脇に身体

をすり寄せている小菊の姿が眼にちらつき、彼をかつとさせた。

「南町奉行鳥居甲斐守家来と言え、むろん、役目のうえから名前を訊いているのだ」

と、茂平次は肩を上げて言った。

「ほほう、異なことを聞く」

と、士は朱塗りの杯を唇から離して微笑した。

「鳥居殿の家来衆と役人とは違はずだが、そのへんはどうか？」

「どっちでも同じようなものだ。当節は厳きびしいお布令ふれいの取り締まりがわれわれの主人鳥居甲斐守から出ている。家来たるわれらが普通の屋敷者と違うのは当たり前だ」

茂平次は言い放った。

「変な理屈だが、まあ、あんたの問いに答えよう」

と、士は穏やかな声で言った。

「わたしは青山に住む二千三百石の旗本飯田主水正もんどの水ようという者だ。鳥居殿のご家来なら、以後見知ってもらいたい」

茂平次は、それを聞いて少しひるんだ。相手は意外に大身だったのだ。こういう身分の者には町奉行所の手はつけられなかった。

「それは失礼しました」

茂平次は氣勢をそがれて、急に声まで変えた。しかし、このままでは引っ込みがつかない。惚ほれた女の小菊が眼の前にいる。背後にはこの家のおかみや芸者たちが成行きを見守っている。以後の權威にもかかわることだった。

「酒をいささか呑みすぎて酩酊したため、思わずこの座敷に足がすべり込んだことはお許しねがいたい」

と、茂平次はいちおう断わった。

「わかっていただければ、それで結構」

飯田主水正は笑って答え、

「しかし、あんたが望まれるこの芸者は、当分、わたしの部屋にるように約束しているので、先約としてこれはご了承ねがいたい」

「わかりました」

と、茂平次は畳にすわって膝に手を置いた。

「だが、ここに参って図らずも拝見したのだが……」

彼は主水正の前にならべられた料理の数々をじろじろと眺め、

「たいそうなご馳走のようですね。どうやら、なかには初ものもあるようで」

と、皮肉に出た。

「さよう」

と、主水正は平気で引き取って、

「わたしは食べものには凝るほうでな。友達に通だと申している。まあ、それほどでもないが、とにかく、料理だけは吟味する性質だ。やはり食べものは季節のハシリにこしたことはない。これまで馴れた舌では、急に粗食もできませんでな。なけなしの金を使ってここに食べにきている」